

平成17年度テーマ展

時代のものさし

～旧石器・縄文時代～

展示関連遺跡の紹介

東峰遺跡2・4地点

当遺跡は標高約300mを測る伊予市双海町の山間部に立地しています。調査では後期旧石器時代前半期と後半期、さらに縄文時代早期・前期・後期の遺構・遺物が確認されました。

最も古い段階の後期旧石器時代前半期では、台形様石器、石斧などの石器があり、火山灰分析の成果から始良Tn火山灰(AT：約25,000年前)*降灰以前の石器群であることもわかりました。これは四国で最も古い石器群として評価されました。

後期旧石器時代後半期の石器には、ナイフ形石器などがあり、いずれも始良Tn火山灰降灰以後のもので、約2万年前の石器群であることがわかりました。

縄文時代では後期の集石遺構や、縄文土器や石器などが発見されているばかりでなく、早期や前期の遺物が少数確認されています。

*展示パネル「火山灰の役割」参照



宝ヶ口I遺跡

当遺跡は、道前平野を流れる中山川の左岸にあり、標高115mの丘陵地に立地しています。発見された後期旧石器時代後半期の遺物は、角錐状石器、スクレイパー、使用痕のある剥片、石核などで、赤色珪質岩や黄褐色の頁岩、サヌカイトなどの石材が使われていました。

また、発見された石器のなかには、複数の石器が接合する状況も確認できています。石材を打ち割った状態を直接確認できるもので、当時の石器製作の具体的な様相を知ることができました。



高見I遺跡

当遺跡は、標高約300mを測る伊予市双海町の山間部に位置し、周囲には険しい山々と独立丘陵が点在しています。ここでは後期旧石器時代後半期と縄文時代後期の遺構・遺物が発見されました。

後期旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、石核などがあり、石器石材には赤色珪質岩やサヌカイトが使われていました。さらに接合資料と呼ばれる石器の接合状況が3例確認されており、ナイフ形石器のような狩猟具を作る状況が詳細に確認できています。

縄文時代の主な遺物には、SX-01から出土した縄文土器があります。この土器の底部には直径約6cm焼成後穿孔が認められ、さらに穿孔のまわりには白色の付着物が残されていました。



水戸森遺跡

当遺跡は、肱川の上流域である中山川左岸、標高約160mの丘陵上に立地しています。発掘では後期旧石器時代後半期の石器群を発見することができました。発見された石器はナイフ形石器、スクレイパー、石核などで、その多くが赤色珪質岩製でした。

この石材に注目してみると、周辺における後期旧石器時代遺跡の石器と比較した時、水戸森遺跡の石器は大形なものや粗割り段階に復元できる接合資料が多いことがわかります。このことは、水戸森遺跡が石材原産地に近い遺跡であることと関連していると思われます。つまり、石材原産地に近い遺跡であるほど、石材の搬入量がより多くなる傾向を把握できたわけです。

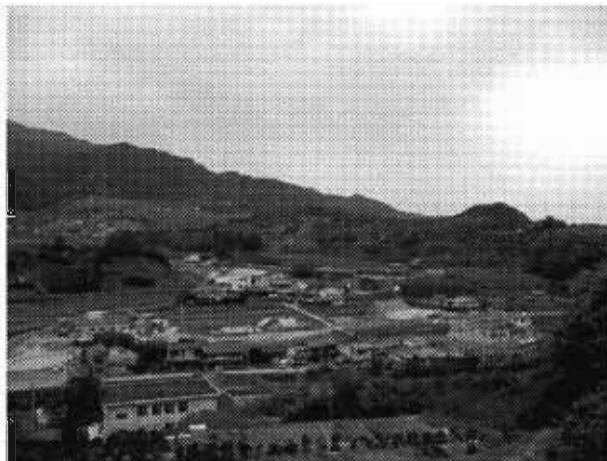
この遺跡の発見によって、愛媛県内における後期旧石器時代の石材利用を具体的に検討することができるよう。



猿川遺跡

当遺跡は、北条平野に流れ込む立岩川に面した河岸段丘上に位置します。調査区は標高105mの段丘先端部にあたり、縄文時代と中世の遺構面が確認されました。中世面の下からは厚さ約50cmの堆積層が検出されましたが、この層は鬼界アカホヤ火山灰(約6,500年前)*を含む層で、残存状態は良好でした。

検出した遺構はピットや土坑などが中心ですが、縄文時代後期の集石遺構もみられます。出土遺物は後期の磨消縄文土器や無文・条痕文土器、また早期の楕円や山形の押型文土器があります。特に早期の押型文土器は口縁から底部にかけて残存する大型の破片で、形や大きさがよくわかります。また、この遺跡からは愛媛県内では産出しない黒曜石やサヌカイトなどの石器素材が出土していますが、特に黒曜石の素材は今までに県内で出土したものの中でも最大のものです。



*展示パネル「火山灰の役割」参照

長命寺遺跡

当遺跡は、石鎚連峰の赤石山系が瀬戸内に向かって急傾斜で下り、深い谷によって分断された標高100mの丘陵先端部に位置します。

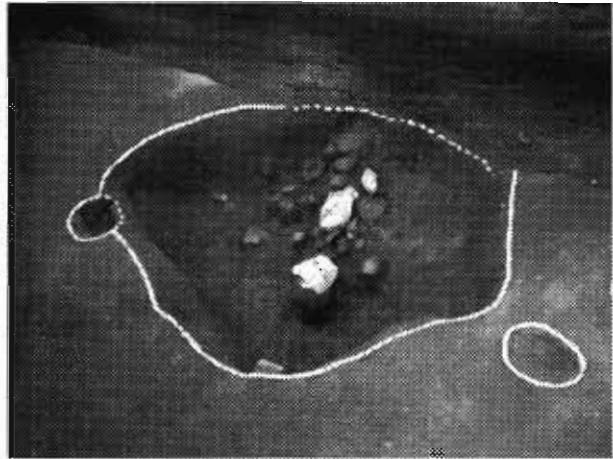
調査区は傾斜面でしたが、最も低い位置から弥生時代中期の竪穴住居と土坑、最も高い位置から縄文時代早期の土坑が検出されました。この早期土坑や周辺の包含層からは押型文土器や無文土器などが大量に出土しました。調査当時、東予地区での早期土器の出土は珍しく、数百点もまとまった数の出土は初めてでした。また谷を隔てて西の丘陵上(医王寺Ⅲ遺跡)では、早期の落とし穴状遺構が検出されています。



福成寺遺跡・旦之上遺跡

両遺跡は、同一河岸段丘(標高37～60m)上に展開する縄文時代から中世の集落跡で、福成寺遺跡では主に縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代中期、古墳時代、中世の遺構や遺物を検出しました。旦之上遺跡では、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代、古代、中世の遺構や遺物を多数検出しました。

特に縄文時代の遺物は充実しており、早期では楕円や山型の押型文土器や無文土器が出土しました。また南九州の早期後半の土器として有名な墓ノ神式と併行の土器や、大分県などに出土例の知られている線刻文土器に類似したものもみられます。後期ではほとんどの土器が前半のもので、特に中津式が多く、高知県の標識土器である宿毛式も多くみられます。晩期土器の出土数は多くないのですが、土坑からまとまった資料が出土しています。その中には突帯文の初源的な土器やミニチュア土器、また、東日本系の注口土器など極めて珍しいものも含まれています。



水崎遺跡

当遺跡は、今治市波方町の水崎海岸の海中で発見され、1974年に調査が行われました。出土遺物は縄文時代前期から晩期の土器や石器で、海浜の遺跡らしく漁撈に欠かせない大型石錘もみられますが、県内では出土する遺跡が極めて少ない前期と中期の土器が注目されます。土器表面の模様は竹状工具を多用した爪形文や沈線文と、貝殻を押し当てて模様を付けるもの



などがあり、瀬戸内対岸の岡山の遺跡との共通性がみられます。当地における前期・中期遺跡の調査蓄積がなく、現在でも山間部の代表的遺跡である中津川遺跡(西予市城川町)と対峙して、海浜部における代表的遺跡として重視されています。

こまつがわふじき 小松川藤木遺跡

当遺跡は、石鎚山系の綱付山を源流とし、中山川の支流にあたる小松川の標高14mの河川敷で発見されました。また、小松町の低位丘陵上(標高40m前後)には縄文時代の遺跡が多数知られています。以前は小松川遺跡という名称で、県内の縄文時代後期遺跡の代表でしたが、本報告書を発刊するにあたり小松川藤木橋上流に位置することから名称が改められました。



検出された遺構は竪穴住居や土坑などで、特に縄文時代の竪穴住居は県内でもまれで、4棟も確認されたのは初めてです。いずれの住居も円形か隅丸方形で、床面の中央付近に炉を持っているものもあります。

遺物は縄文時代後期の土器や石器で、土器では磨消縄文と条痕を施した深鉢や浅鉢が最も多く、注ぎ口をもつ珍しい土器もみられます。また、破片も大きいので文様の全体像や器形も判断できる資料に恵まれています。

つるぎがもと 鶴来が元遺跡

当遺跡は、中山川の支流にあたる妙之谷川の右岸に形成された標高46mの河岸段丘上に営まれています。調査区は標高57mまでの傾斜面に位置し、縄文時代早期・後期、中世の遺構や遺物が検出されました。



遺構は円形、隅丸方形、不整形などの土坑が中心で、傾斜面下位の比較的平坦な箇所集中していました。特に後期土器は出土が多く、後期前半の良好な資料となりました。なかでも底部に複数の孔を開けた通称「多孔底土器」と呼ばれる土器は、鉢形の全体器形が復元できる注目の資料です。底部に付着している白色物質の理化学的分析を実施したところ水産物の特徴を持つ脂肪酸が多く検出され、貝や魚類のものより海藻など植物質の数値が高いことが判明しました。この分析結果と底部に孔がある点から、海藻類を蒸すために使用されたのではないかと考えられます。

井門Ⅱ遺跡

当遺跡は松山平野のほぼ中心部に位置し、平野の中心部を流れる重信川の支流である内川沿いに形成された河岸段丘上に立地しています。ここでは主に縄文時代後期の遺物が発見され、深鉢形土器や打製石斧や敲石などの石器がありました。



縄文時代後期の土器を詳しくみると、中津式土器や福田Ⅱ式土器と呼ばれる後期前葉のものや、津雲A式土器や彦崎Ⅰ式土器などの後期中葉のものがありました。こうした土器の発見は松山平野でも少なく、この地域の貴重な歴史資料となりました。

犬除遺跡2次調査

当遺跡は愛媛県と高知県の県境にある御檜盆地にあり、この盆地の周囲に形成された河岸段丘上に立地しています。ここでは縄文時代早期・前期・後期の3時期にわたる遺構・遺物が確認されていますが、その多くが縄文時代後期の遺物で占められています。



縄文時代早期の遺構には集石遺構があり、繊維混入厚手無文土器、撚糸文土器などの土器や、石斧、石鏃、スクレイパーなどの石器が発見されています。

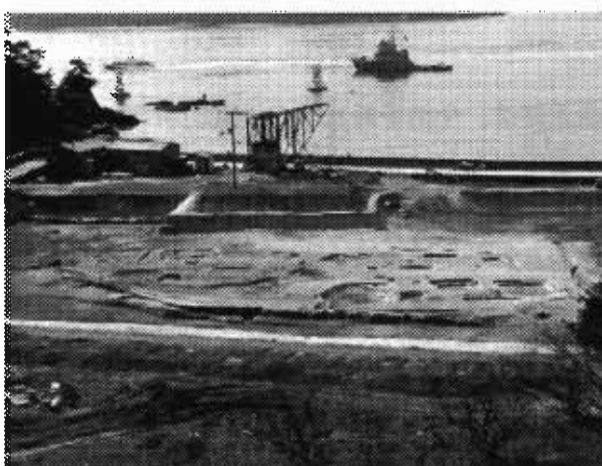
縄文時代後期の遺構には、配石墓、集石遺構、土坑がありました。配石墓は墓坑の側面に扁平な円礫を配したもので、県内2例目の発見となりました。遺物には宿毛式土器、三里式土器、片粕式土器などの縄文土器があり、石鏃、石斧、スクレイパー、石錐などの石器も発見されています。

当遺跡出土遺物の約6割が石器で、隣接する松田川で産出される頁岩を原材料とした石器製作跡であると考えられます。縄文時代の長期にわたる遺物が残されているということは、この地が石器生産地として良好な場所であったことも示しています。

うましまかめがうら 馬島亀ヶ浦遺跡

当遺跡は、^{くるしま}来島海峡のほぼ中央にある^{うましま}馬島に位置しており、縄文時代後期から断続的に中・近世まで存続した集落遺跡で、^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居や^{はったてばしらなてもの}掘立柱建物、土坑、溝などの遺構が見つっています。

縄文時代後期の遺構としては、竪穴住居・土坑・遺物溜まり・^{せきざいしゅうせき}石材集積遺構などがあり、縄文土器や石鏃、スクレイパーなどの石器が出土しました。この時期の竪穴住居は、県内において類例が少なく珍しいものです。特に注目される遺物として、石材集積遺構から石器の材料となるサヌカイトの大型剥片や石核が出土しています。これらの剥片や石核は15cmほどの大きさがあり、地面に置かれた状態で出土したので、^{かご}籠や袋などに入れられて保管されていたものと考えられます。石材集積遺構から出土したサヌカイトの^{げんさんち}原産地は、香川県の^{かなやま}金山・^{ごしきだい}五色台付近と考えられます。縄文土器は、^{なみがた}曲線や波形、平行線などの^{らんせん}沈線文や縄文によって^{かしよく}加飾された^{あさばち}浅鉢・^{ふかばち}深鉢が見られ、多くは^{なかつしき}中津式土器～^{あくだけーにしき}福田KII式土器のものと考えられます。



いわや 岩谷遺跡

当遺跡は^{ひろみ}広見川の^{かがんだんきゅう}河岸段丘上に位置しており、周囲を山地に囲まれた山間部に立地しています。ここでは縄文時代後期の遺構として、県内でも最大規模の^{はいせき}配石遺構が発見されました。出土遺物には縄文土器や、^{せきざく}石鏃、スクレイパー、^{だせいせきふ}打製石斧などの石器、さらには^{ゆうこうすいしよくびん}有孔垂飾品と呼称された^{かつせき}滑石製の石製品も見つかっています。

有孔垂飾品は、近年では^{うわじま}宇和島市^{いぬよけ}犬除遺跡からも類似したものが発見されていますが、その出土量は県内では非常に少なく珍しい遺物で、当時の精神生活を考える貴重な資料です。配石遺構は川原石を敷き詰めたり円形に並べるなどの遺構で、^{さいし}祭祀の跡としての評価を受けています。

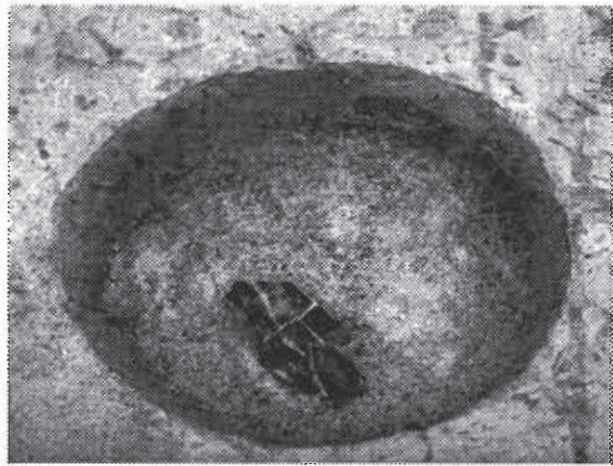
当遺跡は県指定史跡となり、現在でも配石遺構の様子を見学することができます。



あがた 阿方遺跡

当遺跡は、今治平野北部の^{ちかみ}近見山南麓の小丘陵と山田川などによって^{かいせき}開析された小谷に位置しています。

確認された土坑や溝、自然流路などの遺構から、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・木製品・獣骨などの遺物が多量に確認されました。これらのうち縄文土器は、^{はじょう}波状や^{へいせん}平縁形状の口縁部を持ち、肩部に貼り付けられた^{とつたい}突帯や口縁端部に^{きごめ}刻目を施す^{ふかばち}深鉢や、縄文や刻目が無く^{ちんせん}沈線やミガキによってシンプルに仕上げられた^{あさばち}浅鉢などがあり、縄文時代晩期ごろのものと考えられます。浅鉢のなかには、黒色の器面に赤色の^{じゆしじょうとりょう}樹脂状塗料が塗られているものがあります。これらの土器は窓状の^{くかくもん}区画文などを意識して塗彩しており、東日本の土器と同じ意識を感じることができます。縄文土器に樹脂状塗料を塗る例は東日本、特に東北地方において数多く確認することができます。



どうごいまいち 道後今市遺跡10次

当遺跡は、松山平野の北側に展開する^{んかなわ}高縄山系から発達した^{せんじょうち}扇状地上に立地しています。ここでは縄文時代晩期の土器や石器が発見されました。特に多くの遺物が含まれていた11号土坑からは、^{ふかばち}深鉢、^{あさばち}浅鉢、^{つば}壺などの多様な器種が認められる縄文土器、香川県坂出市を^{さかいでし}原産地とするサヌカイト製の^{せきぞく}石鏃や^{せきすい}石錐、さらに^{えんぱんがた}円盤形土製品なども出土しています。

また、出土した石器の中には^{せきぼう}石棒と呼ばれるものがあります。これは^{さいし}祭祀に使われたものと考えられているもので、本遺跡で発見されたものは最大長55.0cm、重量2,290gを測る大形なもので、^{けっしょうへんがん}結晶片岩を石材として表面の大部分は丁寧に磨き上げられていました。この周辺で石棒を使った祭祀が行われていたことは確かなようで、当時の精神生活を垣間見る発見となりました。

